

## 学生運動とインド民主主義

向 田 公 輝 \*

筆者は、インド外交、とりわけ最初のインド人民党（Bharatiya Janata Party：以下、BJP）政権であるヴァージペーイー政権期（1998年3月～2004年5月）を研究テーマに、2019年8月1日～9月30日にかけて、インド・ニューデリーにおいてフィールドワークを行なった。その際、インドの名門国立大学として知られるジャワーハルラル・ネルー大学（Jawaharlal Nehru University：以下、JNU）に滞在し、同世代のインド人学生たちと多くの時間を過ごした。

インドの学生は、友人同士で政治議論をすることが当たり前であり、自分が雑談の輪に加わっている時でも、積極的に自分の政治的意見を話すことが歓迎され、また求められた。とりわけ、日本人の研究者はモーディー首相の貧困政策や外交政策、宗教対立、カースト問題についてどのように考えているかということが彼らの主な関心であったようである。さらに、インドでは、国政政党などの学生組織に参加する学生の数が日本と比較して圧倒的に多いと感じた。

JNU内には、現在のBJP政権を支える民族義勇団（Rashtriya Swayam Sevak Sangh：以下、RSS）に所属する学生団体である全インド学生会議（Akhil Bharatiya Vidyarthi

Parishad：以下、ABVP）、現在の野党で、かつてインド政治を支配していたインド国民会議派系の学生団体である全インド学生連盟（National Student Union of India：以下、NSUI）、科学的社会主義を重視する全インド学生連合（All India Students Federation：以下、AISF）、ビルサ・アンベードカル・プーレ学生協会（Birsa Ambedkar Phule Students Association：以下、BAPSA）、マルクス主義の学生団体であるインド学生連合（Students Federation of India：以下、SFI）、マルクス・レーニン派の全インド学生協会（All India Students Association：以下、AISA）といった多くの学生組織が存在していた。とりわけ、JNUやデリー大学のABVPやNSUIで幹部を務めた学生のなかには、将来、BJPやインド国民会議派の国会議員候補や州議会候補として擁立される者も多かった。

### 学生との交流

私はJNUの学生寮に滞在し、インド人のルームメイト3～4人と2ヵ月間共同生活を行なった。ルームメイトの2人は、BAPSAの活動家で、1人はインド国民会議派の活動家であった。

BAPSAとは、かつての不可触民であるダ

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

リトや主に山岳地帯に居住する部族民など、これまで虐げられてきた人々のために政治を実行することを主張する学生組織である。彼らは、ダリト解放運動の指導者であり、初代法務大臣としてインド憲法の起草者となったアンベードカルの子息を名乗り、アンベードカルは、M.K. ガーンディーの指導したハリジャン（「神の子」の意、不可触民解放運動を展開するなかで、ガーンディーが使用した呼称）解放運動を厳しく批判し、対立していたため、BAPSA の人々はガーンディーをカースト秩序の維持を図った人物として批判的であった。私は、今までガーンディーに対する肯定的な評価になじんできたため、「インド独立の父」としてのガーンディーの功績を批判する人々との交流は新鮮であった。

### 政党の活動

ルームメイトのひとりとは、10月21日に行なわれたハリヤーナー州議会選挙の運動員として活動し、選挙が間近に迫った9月以降、早朝ニューデリー中心部の会議派本部へ行き、選挙運動の手伝いをする生活を行っていた。私も、インド政治を学ぶ貴重な機会だと考え、数回ほど会議派本部へ連れて行ってもらったが、ラフル・ガーンディー、ソニア・ガーンディー、などのガーンディー家一族、2004年から14年まで10年間首相を務めたマンモハン・シンの写真が並んだ大きな選挙ポスターが入りに掲げられ、質素な建物のなかに、多くの候補者や党員が詰めかけていた。



写真1 インド国民会議派本部にて、ハリヤーナー州議会選挙運動のために集まる立候補者や運動員の人々

私は、彼に選挙応援を毎日行なう理由を尋ねると、「俺は将来、会議派から立候補して議員になって、ダリトや貧困層のための政治をしたいんだ」と言っていた。会場には、私と同世代の若い党員も多く参加していた。

### 学生自治会選挙

インドの大学では毎年9月頃に学生自治会の役職を巡って選挙が行なわれ、JNUにおいても9月上旬に自治会長、副会長、書記長等の選挙が行なわれた。学生自治会選挙期間中は、JNU内の各学生組織が候補者を出し大学内のさまざまな場所で選挙集会や演説が行なわれた。2019年の自治会長選挙では、ABVPに対抗する形で、AISA, SFI, AISFといった左派団体が中心となって「Left Unity」を結成し、NSUIやBAPSAも部分的に独自候補の擁立を取り下げることで「Left Unity」との共闘姿勢を示した。反ABVP系の選挙集会は共同で行なわれ、Facebook等のSNSも存分に活用して選挙戦を展開し



写真2 JNU内の広場にて、「Left Unity」が主催した選挙集会

た。その結果、デリー大学などの他大学の学生自治選挙ではABVPが勝利しているなかで、JNU学生自治選挙では「Left Unity」がABVPを破り勝利した。

学生自治会選挙では、学生寮の設備改善等の学生自治に関わる問題以上に、モーディー政権の政策の是非など国政問題が大きな争点となった。私も、キャンパス内で各学生団体主催の集会や学生同士のディベートの場に参加し、国際政治やインド政治を研究する学生や政治家を志望する学生とカシミール問題、国内政策、外交政策に関する議論を深めることができた。

### カシミールの自治権撤廃

とりわけ、8月5日にジャンムー・カシミール州に対して特別の自治を認めてきたインド憲法370条が撤廃され、カシミールを新たに2つの連邦直轄州に分割する大統領令が発表されたこともあり、カシミール問題が学生選挙の重要な争点となった。インドの外交政策にとっても重要な意味をもつカシミール情勢が大きく動く様子を学生との議論や報道を通して観察することができた。

ABVPの学生たちは、8月6日には憲法370条撤廃を祝福するピラを校舎で配っていた。彼らは憲法370条撤廃を「長く待たれた歴史的瞬間」であり「ジャンムー・カシミールは反インドを信条とする独裁政治から解放された」と表現した。続けて、憲法370条撤廃によって「カシミール住民を政治エリートや分離主義者、イスラーム聖者たちから解放する」と表現し、「パキスタン側カシミールからの越境攻撃への対策、インフラ開発が遅れている地域への中央政府による投資の拡大を可能にする」と主張した。

他方で、左派組織も、憲法370条の廃止とその後の混乱を「人権侵害」や「ジェノサイド」という言葉を用いて厳しく批判し、カシミールの人々との共闘を唱えた。たとえば、NSUIは、憲法370条撤廃が宣言される前後の時期のカシミールにおいて、インド軍の大幅増員が行なわれ、カシミール人政治家の自宅軟禁やインターネットの停止が行なわれた点などを問題視し、「民主主義と連邦主義の撲殺」と表現した。左派組織間では、カシミールや国内政治をめぐる諸問題での反ABVPの姿勢では一致しており、全候補が合同で行

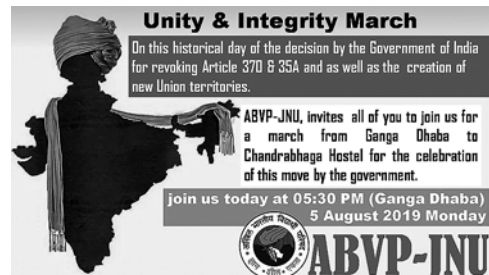


写真3 憲法370条撤廃を記念して、SNSでデモ行進を呼びかけるABVP

なった討論会でも、ABVP の候補対「Left Unity」の図式のディベートとなっていた。

### インド民主主義と学生運動

インドの学生たちは多くが学生組織に参加し、学生自治会選挙を通して学生同士の政策論争を行なうとともに、時には州議会選挙などで国政政党にも活動員として加わることで、民主主義へ主体的に関わろうと努めているように感じた。また、大学内や警察署前等でデモや集会を行なうなど、直接的な要求という形で民主主義に参加しようとする動きもみることができた。インドでは多様な主義主張の学生団体が運動を動員し、選挙を通じた間接民主主義やデモ、集会を通じた直接要求運動が展開されている事が特徴的である。

また、インドの経済発展に合わせて、学生運動の形も変わってきているように思われる。現在の学生運動では、SNS を通じて、学生たちは情報の収集や自身の主義主張の発信を行ない、学生団体は政策の宣伝や演説の動画を拡散することで学生メンバーの拡大を図り、デモ行進や集会の呼びかけを行なうことで動員を行なっている。とりわけ、庶民向けの安価なスマートフォンが幅広く普及したことにより、ABVP 支持の学生、NSUI 支持の学生、ダリト学生、共産党支持の学生関係なく、多くのインドの学生が SNS を通じて政治的意見の発信を行なうことが可能となった。JNU 学生自治選挙では、多くの学生団体とその運動員たちが、候補者の顔写真や演説、集会の画像や動画を毎日のように拡散するとともに、ともすれば、それ以上に、相手

の陣営への批判も展開していた。

国政政党も学生組織に力を入れており、RSS の支援によりインド一の組織力をもつ学生組織となった ABVP に対して、NSUI もソニア・ガーンディー総裁の息子であるラフル・ガーンディーによって組織の拡大が行なわれた。ABVP や NSUI は、JNU のあるデリーだけでなくインドのほぼ全域の主要都市に活動拠点が存在し、組織的な運動の動員が行なわれており、とりわけ、ABVP はデリー大学など他大学の学生自治選挙では勝利を収めている。他方で、JNU においては、ABVP や NSUI に比べて組織の動員力で劣る AISE, SFI, AISA, BAPSA といった学生組織も、SNS を積極的に利用し、時には「Left Unity」のような連立組織を結成することで、ABVP に対抗する影響力を示しているのが特徴的である。

インドの学生運動は、多様な主義主張の学生団体が運動を動員し、自分たちの政治的要求を大学自治レベルだけでなく、国政レベルにまで届けようとしていることが特徴的であるといえる。これこそまさにインド民主主義を支える重要な柱のひとつであり、彼らの活動こそ、民主主義の可能性を示すものと評価できよう。

これからの研究では、カシミール問題における与野党の議論の歴史を丁寧に整理したうえで、ヴァージペーイー政権が与野党の政治家や支持者からどのように評価されていたかという点にも着目し、ヴァージペーイー政権期インドの外交政策がどのように展開されたかを明らかにしていきたいと考える。